

説明文を自分の力で読み解釈できる子を目指して

新発田市立五十公野小学校
鈴木 真史

1 はじめに

文章を読む時、自分が理解している言葉だけで書かれているとは限らない。理解できない言葉に出会った時、人は、辞典や辞書で調べて言葉の意味を理解していく。ところが、調べただけで理解できたと言えないことが多い。自分の経験や知識と照らし合わせ、自分の言葉で置き換えることができたとき初めて理解できたことになる。私は、この状態を解釈により理解できた状態と考える。しかし、子どもたちの中には、調べたことをそのままノートに写しさえすれば理解できたと考えたり、読むことができさえすれば理解できたように考える子もいる。これでは本当に理解したことにならない。文章を理解しながら読むにはどのような手だてを講じればよいのか。私は、文章を読んだとき、まず、「問い」を持つことが大切であると考えた。「問い」とは、「なぜ〇〇なのか」「〇〇は何なのか」「〇〇とはどういうことなのか」といたものを指す。そして、「その問いに対する答え」を表現していくことが解釈により理解できた状態と考える。問いを持ち、問いに対する答えを見つけながら読める子が説明文を自分の力で読み解釈できる子と考える。

2 本実践で取り上げた手だて

【教材】

説明文 「生き物はつながりの中に」 光村図書

(1) 問いを持たせるために

疑問な点を指摘してほしいと言っても、どのように疑問を見つければよいのか分からない様子であった。そこで、次のような手だてを講じた。

① 文章を徹底的に読み込むこと

実際には、10回以上の音読をさせ、1箇所も間違えてはいけない音読テストに全員が合格するまで続けた。

② 難語句は、辞典で調べ、ノートにまとめること

初期段階では、解釈まで行うのではなく、辞典で調べたことを書き写す程度である。

③ 自分が理解できている言葉でも説明できるか考えさせる

「チロ」というイヌが登場する。「イヌの名前」ということでも説明はつく。しかし、「どこのイヌなのか」「なぜチロを持ってきたのか」となるとさらなる説明が必要となる。一見理解できたかに思う言葉でも、さらに説明を加えなければならぬことがある。

(2) 問いを解決させるために

問いを分類させることで解決の見通しを持たせようと考えた。分類の観点は、次の3点

である。

- ① 答えが教科書に書いてありそうなこと
- ② 答えは、辞書等で調べると分かりそうなこと
- ③ 調べても分かりそうもなく自分で想像しなければならないようなこと

基本的に①によって解決することが文章を読む力を付ける上では大切である。しかし、①だけでは解決できないものもある。そこで、②の分類となる。専門的な用語は、辞書等に頼らざるを得ない。また、②でも解決できないものもある。前述の(1)③の例のような「チロ」の問題である。「なぜチロを持ってきたのか」といった問いの答えは、教科書にもなく辞書でも調べられない(インターネットは可能と思われるが膨大な時間がかかると思われる)。そこで、想像しなければならない。こうした分類をすることを身につけると、どのように調べていけば文章を理解しながら読めるのかが身に付くと考えられる。

3 本実践の概要

(1) 単元の目標

- 「問い」と「答え」によって説明文を読みとることができる。

(2) 子どもの実態

児童は、指示語の差す内容や言い換えの言葉を見つけることは容易である。しかし、内容を言い換えたり、言い換えられた部分を見つけたり、自分なりの解釈を加えたりすることは苦手である。また、自分の考えは持っている子が多い。しかし、自分の考え以外の良さに気づく児童は少ない。主張を繰り返すのみで意見のかみ合うことが少ないのが実情である。

(3) 指導計画

- 1～2時 読みの練習と難解な言葉を調べる。
- 3～5時 問いを見つけ、解決の見通しを持つ。
- 6～8時 問いの答えを見つけたり、調べたりする。
- 9～11時 発表会をする。
- 12時 自分とまわりのつながりを考えまとめる。

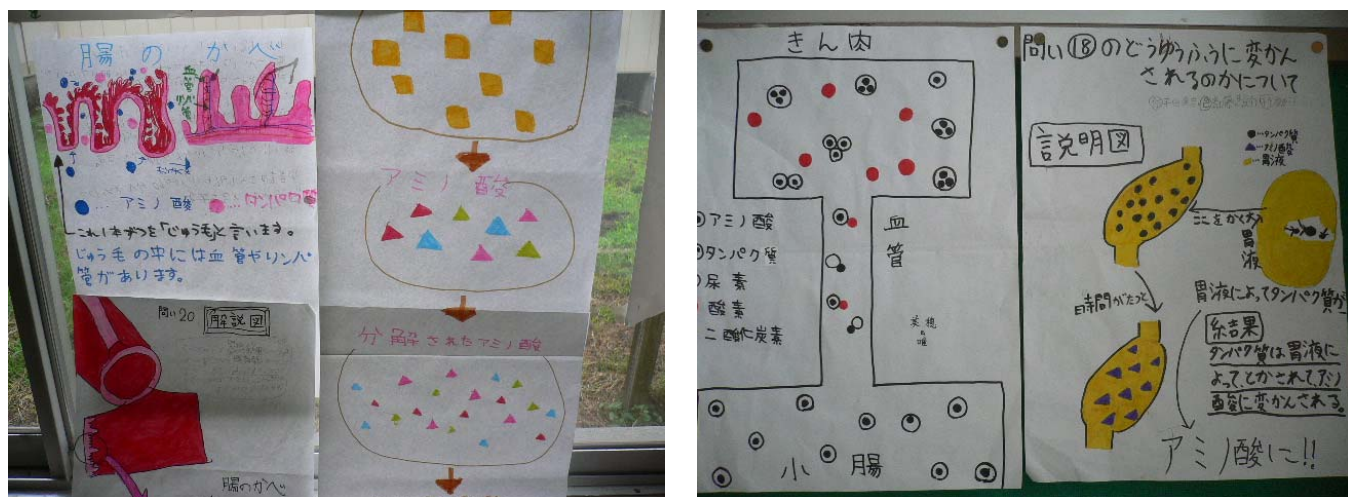
4 実践の様子

(1) 問いを持つこと

2で述べたような手だてで問いを考えさせた。初めは、個人で考えさせ、その個人の問いを一覧にまとめて示した。以下がその結果の一部である。

そのまま読みさえすれば解答になると思う子もいるため、友達が理解できるように発表することを目標とした。時間はかかったが、発表用の原稿の他、資料を用意して発表に備えていった。

自分で想像することについては、苦手な子も多かったため、問いごとに全体で自由に想像して発表させた。前述のチロの問いについては、「筆者が飼っていたイヌだったのではないか」「一般的なイヌの名前にしたのではないか」「たまたま思いついた名前だったのではないか」といった考えが出てきた。いずれも間違いではない。ただ、ここでは、筆者の身近にあるものという視点と一般化という視点の二つがあることを確認し、多様な見方をすることが大切であることを押さえた。



調べると分かる問いに対する答えを発表するため子どもたちが用意した資料

5 実践を終えて

(1) 成果

【文章を読む際の新たな視点】

子どもたちは、説明文の読み込み方を身につけていった。これは、今後様々な文章を読み込む力になる。

【教科書から探す】

文章を読みながら疑問を抱くことがある。その時、子どもたちは、文章に立ち返ることを学んでいった。一見当たり前のようなことではあるが、じっくり読み込むことで本文に答えがあるものだというのを改めて感じていた。読みの基本を確認できた。

(2) 課題

- ・「調べるとわかること」なのか「予想しなければならないこと」なのかの区別がつきにくい子がいた。
- ・全ての問いを全員が解決していくのには時間がかかる。個別の作業と全体の作業のバランスを考え授業を進めていくべきだった。
- ・説明文では大切な指導である、筆者の主張を述べるための段落構成の学習については、特に重点指導をしなかった。これは、段落構成を中心に置くよりも、自ら読む力を付けたいという願いからであった。自ら読む力をつけてこそ段落構成まで見えてくると考える。次回の学習で取り上げていきたい。

